あいまい事態における形式性追求傾向に関する予備的検討

○高橋尚也¹・竹村和久²・井出野尚³・大久保重孝³・玉利祐樹³
 (¹立正大学心理学部・²早稲田大学文学学術院・³早稲田大学文学研究科)
 キーワード: 形式性、社会規範、尺度開発

A preliminary study about tendency of overweighting formality in ambiguous situation
 Naoya TAKAHASHI¹, Kazuhisa TAKEMURA², Takashi IDENO³, Shigetaka Okubo³ and Yuki TAMARI³
 (¹Rissho University, ²Waseda University, ³Waseda University Graduate School of Letters, Arts and Sciences)
 Key words: Formality, Social norm, Development of scale

目 的

社会学者 Ritzer (2004) は、効率性、計算可能性、予測可能性、制御という要素が支配的になっている社会を、「マクドナルド化した社会」とよび、このような傾向は本来合理的なものであるが、これらを過度に追求し、人々がこれらの価値観を内在化することで脱人間化という逆説をもたらすと論じている。これらの要素には共通して形式化や画一化が含まれている。しかし、Ritzer の議論は論考にとどまっており、実証的な検討は行われていない。

従来、心理学において、こうした画一化や形式化を追求する傾向は、権威主義的パーソナリティの一側面（形式主義）として捉えられてきた (Adorno, et.al., 1950)。しかし、形式主義の概念には、Ritzer の指摘した効率性や計算可能性といった要素は含まれていない。そこで本研究では、あいまい事態における形式性追求傾向に関する尺度を予備的に作成し、従来権威主義的パーソナリティとの関連が実証されてきた変数や社会規範遵守行動との関連を探索的に検討する。

方 法

1 調査対象と調査方法 関東および四国の大学に通う学生 260 名 (男性 33.8%、女性 64.6%、平均年齢 19.3 歳)。集団配布集団回収形式の質問紙調査。

2 調査時期 2009 年 7 月。

3 分析項目 (1)あいまい事態における形式性追求尺度候補項目 (独自作成: 25 項目)、(2)社会規範遵守行動 (独自作成: 6 項目)、(3)社会に対するリスク認知 6 項目、(4)個人に対するリスク認知 6 項目、(5)形式主義尺度 (Buss, 1986, 大淵訳, 1991)、(6)拒否回避欲求尺度 (小島ほか, 2003)、(7)一般的信頼 (山岸, 1998)、(8)あいまいさ回避 (増田(1998)より 10 項目抜粋)、(9)正当世界信念尺度 (今野・堀, 1998)。

結 果

1 形式性追求尺度候補項目の因子分析結果 形式性追求尺度候補項目 25 項目について、主成分解・プロマックス回転の因子分析を行ったところ、4 因子が抽出された (固有値は順に 4.91, 1.85, 1.67, 1.36; 因子分析結果の詳細は発表時に示す)。第 1 因子には「マニュアルがないととても不安になる」など 8 項目が高い負荷を示したため、「マニュアル志向」と解釈した。第 2 因子には「ルールは厳密に守っていくことでこそ意味をもたらすと思う」など 6 項目が高い負荷を示したため、「決定重視」と解釈した。第 3 因子には「不都合があると感じた場合でも、きまりに反していなければそのままにしておく」など 6 項目が高い負荷を示したため、「責任回避」と解釈した。第 4 因子には「個人経営の店の商品よりは、チェーン店やスーパーのパッケージのほうが安心できる」など 5 項目が高い負荷を示したため、「型への安心」と解釈した。各因子に高い負荷を示した項目を解釈の方向に合わせて加算し、尺度化した。

2 その他分析項目の尺度構成 独自に作成した「個人リス

ク認知」「社会リスク認知」「社会規範遵守行動」のそれぞれについては、主成分分析によって一次元性が確認されたため、単純加算を行い尺度化した。また、「一般的信頼」「あいまいさ回避」は、主成分分析を行ったところ一次元性が確認されたため、単純加算を行い尺度化した。「形式主義尺度」は主成分分析の結果、4 項目が第 1 主成分に高い負荷を示さなかったため、負荷の高かった 6 項目を単純加算し指標とした。「正当世界信念尺度」は出典に従い、「因果応報」「不公正な現状」の 2 因子で単純加算を行い指標とした。

3 形式性追求傾向と社会規範遵守行動との関連 形式性追求傾向やその他の変数が社会規範遵守行動をどのように規定するかを検討するために、重回帰分析 (変数増加法) の繰り返しによるパス解析を行った。解析に際し、変数を 3 水準に分け、第 3 水準の変数を基準変数とし、上位の変数を説明変数とする解析と、第 2 水準の変数を基準変数とし、第 1 水準の変数を説明変数とする解析を行った。第 1 水準は形式主義尺度、個人リスク認知、社会リスク認知、拒否回避欲求、一般的信頼、あいまいさ回避、正当世界信念の 2 下位尺度とした。第 2 水準は、形式性追求傾向の 4 尺度とした。第 3 水準は社会規範遵守行動とした。解析結果を図 1 に示す。

図 1 社会規範遵守行動を規定する要因

その結果、形式主義は、社会規範遵守行動を、直接および「決定重視」や「型への安心」を媒介して間接に規定していた。また、拒否回避欲求やあいまいさ回避は、「決定重視」を媒介として社会規範遵守行動を促進し、「型への安心」を媒介として社会規範遵守行動を抑制していた。なお、形式性追求傾向のうち「マニュアル志向」と「責任回避」は、社会規範遵守行動を規定していなかった。

考 察

パス解析の結果、形式主義やあいまいさ回避が高い者においても、「決定重視」を媒介とした際は、社会規範遵守行動が高まっていたが、「型への安心」を媒介とした際は、社会規範遵守行動が抑制されていた。この結果は、Ritzer(2004)における形式性追求の逆説に関する論考と対応している。しかし、本研究は少数の対象者に対する探索的知見であり、今後、大規模調査によって因子構造や因果モデルを詳細に検討していく必要がある。

(Naoya TAKAHASHI, et.al.)